



うえの えいこ
上野 エイ子 さん

1927年11月9日生まれ

1971年に水俣病と認定される。

1958年に水俣病の劇症型で夫が死亡。同年、胎児性水俣病患者の子供を出産するが、2歳で死亡する。水俣病で苦しみ差別を受けてきた半生を語る。

1973年、水俣病患者の福祉施設「明水園」に15年間勤務。

1999年4月から水俣病資料館の「語り部」となる。水俣市袋（湯堂）在住。

私は、水俣湾のすぐ南に位置する、袋湾の湯堂という地域。ここは半農半漁を営む集落で生まれ育ちました。結婚後も主人と二人で、豊かな海だった水俣湾で漁をしながら生活していました。

水俣病の発生が公式に確認され、伝染病、奇病と騒がれるようになった1956年に、漁師をしていた父が突然発病し、翌年、奇病として亡くなりました。

1958年、結婚三年目にして子供を授かり、喜んでいたのもつかの間、夫が突然発病しました。暴れてクルクル回ったり、苦しみがきながら、発病からわずか13日で他界しました。

死を悲しむまもなく、夫の葬儀から6日目で生まれた娘は、手足は突っ張ったままだし、首もダラーっとしてすわらないし、病院に行ったら、診断もせずに小児麻痺と言われました。私の周りで起こった相次ぐ奇病の発生に、周囲の人からは変な目で見られ、買い物をするにも、差し出したお金を受け取ってもらえず、伝染病あつかいされました。娘は、何も見えず聞こえずの状態、母親の私を恨みもせず亡くなっていました。解剖され軽くなった娘をおんぶして帰ったこと、当時周囲から受けた差別・偏見などの冷たさを思いだすと、今でも涙がとまりません。

水俣病の体験者として話すことで、どこまでわかっていただけるか不安に思うこともあります。しかし、本当に「水俣病」という悲惨な公害病は二度と起こしてはいけません。その思いから私は語り続けます。私のお願いしたいことは、心と心のつながりを大事にしながら私達と一緒に水俣病のことを勉強して、未来に教訓として引き継いでいってもらうことです。

【写真；娘と二人きりで暮らしていた頃】